おまけＳＳ　付き合って、それから。
～先生と幸福なひととき。前日譚～

※当おまけＳＳはヒロイン視点の作品です。ヒロインが喋ります。
ヒロインの描写が苦手な方は閲覧をお控えください。
※「先生と媚薬と出られない部屋。」のネタバレを含みます。

きっとこの気持ちは、言葉だけで片付けてしまうには軽すぎるのだと思う。

「はぁ」
その日、少しだけ私は緊張していた。
家よ最寄り駅から数駅先。通っている学校から離れた場所で待ち合わせをしていた。
相手はもちろん、先生だ。
電車に乗っている間、少しでも気持ちを落ち着かせるために、図書館で借りた本を読んでみたがあまり効果は無かった。

それでも多少は読み進められたので、少しは知識として頭に入れることができた…ような気はする。
(それでも、まだ足りないんだろうけれど)
目的の駅に着くと私は本を閉じ、電車から降りて改札へと向かう。待ち合わせ時刻の十分前に着いたというのに、ロータリーには既に先生の車が停まっていた。
「顔色良さそうだね」
私が助手席側のドアを開けると、開口一番先生はそう言った。よく見ている。まぁそれもそのはずで、保健室常連の私の具合の良し悪しなど手に取るように分かる…のかもしれない。
(そういえばこの前も言われたなぁ)

先生は私がシートベルトを装着したことを確認するとエンジンを始動させ車を前進させた。
「そこにあるやつ、どっちか飲んでもいいよ」
ドリンクホルダーに刺さっているのはチルドカップコーヒーとフルーツフレーバーの天然水。どちらも私がよく飲んでいるものだった。私は一言お礼を言ってコーヒーを手に取り、ストローをカップに刺した。
(何も突っ込むまい…)

私の好みの把握など、私の具合の良し悪しを測ることと同じくらい先生にとっては造作も無いことなのだろう。
「さて、今日はどうしようかな」
信号待ち。先生はカーナビを操作し現在地周辺の地図を見る。今回のデートの行き先は告げられていなかった。
「どこかにお出かけしようかなーって思ってたんだけど、いくら県内とはいえ誰かに見つからない可能性はゼロとは言えないしね」
ドライブをするつもりなのだろう、先生はナビを操作する手を止めて視線を前に向ける。
「何もしないよ、と言っても信じてもらえないのかもしれないけど」
ぽつり、ぽつりと先生の口から言葉が漏れ出る。
「僕にとっては、君が僕と付き合ってくれることの方がにわかに信じがたいけどね」
柔らかそうな瞼を下に向けたまま、視線をこちらに寄越さない。
先生は思いつめた表情で車を路肩に停車させた。

「どうして君は僕を嫌いにならなかったの？」
嫌いになるべきなのだ、本来ならば。

第三者から見ても、あれは強制性交だと断定してしまっても何ら差し支えはない。
どれだけ相手から好意があろうと、摩訶不思議な部屋に閉じ込められたとしても、到底許されるべきではない。
それなのに私は付き合おうと言われて承諾するわ、デートに誘われてホイホイとついていくわ、バカだとアホだとマヌケだと、クソ味噌に罵られても否定はできない。
私は先生のことを、何故か、どうしても、嫌いになれなかったのだ。
（寧ろ……）

「どうして…？」
嬉しそうなのに、どこか疑っているような、さみしそうな目で私を見てきたからつい口を滑らせてしまったのだ。
「…もしかして嫌いになってほしかったんですか？」
口に出した後、しまったと思った。いやに意地悪なことを言うものだなとすぐさま心の中で反省する。
「い、いやそういうわけじゃなくて、あんまり理解できなかったから…。嬉しいんだけど…えへへ…」

うろたえる先生は部屋にいた時とはまるで別人だった。強引に私に迫ってきて、告白して、行為に及んだ先生とはまるで…。拍子抜けするというか、調子が狂うというか。どう接していいのか分からずに、私は思ったことをそのまま伝えた。
「…先生、他人の気持ちを探ろうとするより、まずは自分の腕のことを気にしましょうよ」
先生の反応など見ずに私は間髪入れずに言葉を紡ぐ。
「まだ痛みますよね、左腕」
白衣をめくってまで確かめようとは思わなかったが、恐らくはかさぶたができて間もない頃だろう。想像するに難くない。先生の傷だらけの腕を頭に思い浮かべただけでも、こちらの腕が痛むような、そんな気さえする。少なからず、自分の心は痛みを覚えた。
「え、あ、や…まぁ…」
予想通りの反応で、ただただうろたえるだけだ。自分の腕を傷つけることは容易いのに、他人に心を触られるとひどく辛いのだろうか。
「…先生、お大事になさってください」
「あ、はい…。え、えへへ、へ…」
これではどちらが「先生」なのか分からない。
一体全体、先生はどうしてここまで年下の私相手に萎縮しているのだろうか。恋人になる

段階を踏まずに、恋人とすることをしてしまったというのに。
思わず先生の首元を見る。

タートルネックの隙間から見える、首にある縄の痕。あの時見た、左腕にある膨大な量のリストカットの痕。首や腕以外にも目を覆いたくなるほどのあざや傷が体のいたるところにあった。
精神的な病を患っているからか、はたまたアブノーマルな性癖なのか、そんなのはどうでもよくて。

先生は、普段「保健室の先生」をしている時には絶対に見せなかった一面を私に見せびらかしたのだ。

接点だって保健室で顔を合わせるくらいでお互いのことを深く知るほど会話すらしていなかった。
「優しそう」で「温和」で「人当たりの良い」「保健室の先生」。そして密かに「女生徒から人気」。

そんな印象の強い保健室の先生が、まさか私に強く病的な程の愛を向けてくるなんて誰が想像するだろうか。寝耳に水だった。先生を好きな女子はこの事実を知ったら大いに悲しむだろう。
先生の見た目は、確かに女生徒に人気が出るほど魅力的な顔立ちをしているし、同年齢のクラスメイトより余程理知的で優しくて包容力がありそうで、大半の人間が抱く第一印象としては良いイメージしか持たないだろう。事実、自分も悪い印象を欠片も持っていなかった。先生の印象が反転するまでは。

「…正直怖かったところはありますよ」
恐怖を感じなかったと言えば嘘になる。刃物を持っている年上の男と非現実的な空間に一緒にいたのだ。殺されてもおかしくない状況で、要求や告白を断るなんて考えもしなかった。
「えっ、あ……ほんとに、それはごめんなさい…、もう無理矢理はしないから…」
先生は眉尻を下げながら、私に今すぐにでも縋り付きそうな程に、あの時とは全く違う弱々しい声で謝る姿はある種滑稽と捉えられても仕方ないだろう。
先生はとても弱い人間なのだ。それは本人が「メンヘラ」と言っていたように、精神的に病んでいて脆さに拍車がかかっているのだろうがそれが根本的な問題ではどうやらなさそう

だった。
「弱い犬ほどよく吠える」というが、正にそうだ。
普段はなんとか普通を装えてはいるものの、一度堰を切ってしまうと要求や感情の発露の仕方が動物的というか、生まれたての無知な赤子と一緒だ。
(先生は、なんというか…)
普通の人間ならば、病んだ人間を好きになるどころか嫌悪してしまう傾向の方が強いだろう。それは決して悪意のある差別感情ではなく、抗えない動物の本能だ。自分の身に危険が迫る可能性があるのなら尚更だ。
だが、弱い個を守ろうとするのもまた動物の本能で。
(…なんというか、本当に…可愛いな)
弱くて脆くて、未成熟で、悪い意味で純粋。そんな先生のことを、私はあろうことか「可愛い」と思ってしまったのだ。
先生を苦しみから助けてあげたい。そして、甘やかしてあげたいとさえ思った。
この気持ちに一番近いものは「母性本能」なのかもしれない。
…初めてのキスやセックスを立て続けに経験し、「刺激」や「衝撃」で頭がおかしくなって

しまったのだろうか。
もしかして、精神的な愛より肉体的な愛の方が勝っているのか…。分からない。
今までの人生、ここまで強く誰かに惹かれた経験が無かったから頭が混乱しているのだろうか？

（先生からの見返りが欲しいわけでも、受け取った愛情を同じ大きさで返したい…義務感に駆られてるわけでもないと思う…けど）
まあ、ただ単に私がお人好しなのかもしれない。でもどうなんだろう。保健室にお世話になっている身として、多少は恩義を感じているのか。とはいえ先生とはあまり交流が無かったものの…。
（なんでだろう、なんでだろう…）
「どうして」「何故」を突き詰めていこうとすればするほど、考えを言語化することに躍起になればなるほど、純粋な感情からは遠ざかる。
それでも私は、胸のモヤを少しでも晴らしたくて。

「……え、と、怒ってるよ…ね？」

…私が色々と考えている間、先生は私の口から何か言葉が出てこないか待っていたようだった。どこまで先生の眉が下がってしまうのか、待っていてもいいのだけれど…。
(伝えたいことはちゃんと伝えておこう)
生唾を飲み込み、小さく深呼吸をする。

「先生に会うまでの間に、本を読んでいたんです」
「？何の？」
きっと私のかじりたての知識では、本職である保健室の先生に歯も刃も立たないのだろうけれど。
「これは私からの気持ちです」
私は、私の気持ちをポケットから取り出し、先生の手のひらの上に優しく乗せた。
「え？」
先生は面食らった顔でそれを見つめる。それは、先日私が先生にあげた物であり、先生の左腕に貼られている物と同じ物だ。
「無償ですから、どうぞ貰っちゃってください」
私の目を見て二、三度まばたきをする。

「…あぁ、なるほど」
先生は私の意図を理解してくれたようだ。小さく笑って、ゆっくりと優しく絆創膏を握りしめて。
「ありがたく頂戴します」
小さな子供がお菓子をもらったみたいに、すごく嬉しそうな顔をするものだから私も思わず口元が綻んでしまう。

私より一回り以上も歳上の先生。
傲慢かもしれないけれど、私が可愛がって、愛してあげよう。
これから先生の傷が癒えても。
母親のように見守ってあげたい。

そう強く思ったのも束の間で、あっという間に先生に溺れて共依存的になってしまったのだけれど。